

令和7年度国際学部入学前指導読書レポート課題図書一覧

※ どの図書を選んだ場合でも1冊全体を通読したうえで読書レポートを作成するようにしてください。

<国際学部関係教員が学生や一般市民を対象として執筆した新書>

宇都宮大学国際学部編『国際学への扉を開く』（下野新聞新書、2024）（本書は入学後、必修授業科目「新入生セミナー」で使用します。）
宇都宮大学国際学部編『多文化共生をどう捉えるか』（下野新聞新書、2018）
宇都宮大学国際学部編『世界を見るための38講』（下野新聞新書、2014）

<学問・教養>

フリードリヒ・A・ハイエク著、西山千明訳『隷属への道』（春秋社、2008）
カエサル著、近山金次訳『ガリア戦記』（岩波文庫、紀元前50年代/1941）
トクヴィル著、松本礼二訳『アメリカのデモクラシー（第1巻 上、他）』（岩波文庫、1835/2005）
岡本隆司『世界史序説』（ちくま新書、2018）
久米郁男『原因を推論する 政治分析方法論のすゝめ』（有斐閣、2013年）
石岡丈昇『エスノグラフィ入門』（ちくま新書、2024）
『現代思想2024年11月臨時増刊号 現代思想+ わたしの留学記』（青土社、2024）

<言語・語学・翻訳>

今井むつみ『ことばと思考』（岩波新書、2010）
白井恭弘『外国語学習の科学—第二言語習得論とは何か』（岩波新書、2008）
白井恭弘『ことばの力学—応用言語学への招待—』（岩波新書、2013）
竹内理『「達人」の英語学習法』（草思社、2007）
柳父章『翻訳成立事情』（岩波新書、1982）
今井むつみ・秋田喜美『言語の本質—ことばはどう生まれ、進化したか』（中公新書、2023）
広瀬友紀『ちいさい言語学者の冒険—子どもに学ぶことばの秘密』（岩波書店、2017）
白畑 知彦『英語習得の「常識」「非常識」：第二言語習得研究からの検証』（大修館書店、2004）
飯田真紀『広東語の世界 香港、華南が育んだグローバル中国語』（中公新書、2024年）
鳥飼玖美子『本物の英語力』（講談社現代新書、2016）
久保田竜子『英語教育幻想』（ちくま新書、2018）
大名力『英語の発音と綴り』（中公新書、2023）

<哲学・思想>

小松裕『田中正造—未来を紡ぐ思想家』（岩波書店、2013年）
内山 節『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』（講談社現代新書、2007）
松元雅和『平和主義とは何か —政治哲学で考える戦争と平和』（中公新書、2013）
ホミ・K. バーバ著、本橋哲也・正木恒夫・外岡尚美・阪元留美訳『文化の場所：ポストコロニアリズムの位相』（法政大学出版局、2012）
井奥陽子『近代美学入門』（ちくま新書、2023）
中沢新一『人類最古の哲学 カイエ・ソバージュ（1）』（講談社選書メチエ、2002年）
ロジェ・カイヨワ著、秋枝茂夫訳『戦争論』（法政大学出版局、2013年）
ピーター・シンガー著、児玉聡・石川涼子訳『あなたが救える命：世界の貧困を終わらせるために今すぐできること』（勁草書房、2014年）

<歴史・民族>

吉見俊哉『ポスト戦後社会—シリーズ日本近現代史〈9〉』（岩波新書、2009）
立川昭二『病気の社会史』（岩波現代文庫、2007）

宮本常一『忘れられた日本人』（岩波文庫、1984）
吉田裕『日本軍兵士 ―アジア・太平洋戦争の現実』（中公新書、2017年）
内藤正典『ヨーロッパとイスラーム』（岩波新書、2004）
大月康弘『ヨーロッパ史——拡大と統合の力学』（岩波新書、2024年）
東海林吉郎・菅井益郎『通史・足尾鉍毒事件：1877～1984』（世織書房、2014年）
小川さやか『チョンキンマンションのボスは知っている―アングラ経済の人類学』（春秋社、2019）
尾形勇・鶴間和幸・上田信・礪波護・王勇・葛剣雄『日本にとって中国とは何か』（講談社学術文庫、2021）

<芸術・美術>

三隅治雄『踊りの宇宙―日本の民俗芸能』（吉川弘文館歴史文化ライブラリー、2002）
高階秀爾『カラー版 名画を見る眼』（岩波新書、2023）
山本浩貴『現代美術史-欧米、日本、トランスナショナル』（中公新書、2019）

<政治・外交・経済>

多湖淳『戦争とは何か 国際政治学の挑戦』（中公新書、2020年）
Ba & Beeson, "Contemporary Southeast Asia The Politics of Change, Contestation, and Adaptation". (Bloomsbury Publishing, 2017)
伊藤亜聖『デジタル化する新興国-先進国を超えるか、監視社会の到来か』（中公新書、2020）

<社会・文化>

齋藤希史『漢文脈と近代日本―もう一つの言葉の世界』（日本放送出版会、2007）
ブレイディみかこ『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』（新潮社、2019）
好井裕明『「あたりまえ」を疑う社会学―質的調査のセンス』（光文社新書、2006）
寒川恒夫『近代日本を創った身体』（大修館書店、2017）
多木浩二『スポーツを考える 身体・資本・ナショナリズム』（ちくま新書、1995）
Mario Vargas Llosa and John King, "Notes on the Death of Culture: Essays on Spectacle and Society", (Farrar, Straus and Giroux, 2015)
渡邊雅子『論理的思考とは何か』（岩波新書、2024）
ホイジンガ著、高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』（中公文庫、2019年）
永吉希久子『移民と日本社会―データで読み解く実像と将来像』（中公新書、2020）
見田宗介『まなざしの地獄―尽きなく生きることの社会学』（河出書房新社、2008）
金菱清編『呼び覚まされる霊性の震災学：3.11生と死のはざままで』（新曜社、2016年）
鈴木裕之『恋する文化人類学―結婚を通して異文化を理解する』（世界思想社、2015）
松村圭一郎『はみだしの人類学―ともに生きる方法』（NHK出版、2020）
藤井省三『現代中国文化探検：四つの都市の物語』（岩波新書、1999年）

<教育・心理・コミュニケーション>

J. デューイ著、松野安男訳『民主主義と教育』（上）（下）（岩波文庫、1975）
春木豊『動きが心をつくる』（講談社現代新書、2011）
岡本真一郎『言語の社会心理学』（中公新書、2013）
岡本浩一『上達の法則 効率のよい努力を科学する』（PHP新書、2002）
藤原聖子『教科書の中の宗教―この奇妙な実態』（岩波新書、2011）
平田オリザ『わかりあえないことから―コミュニケーション能力とは何か』（講談社現代新書、2012）

<地球社会・国際協力>

アマルティア・セン著、大石りら訳『貧困の克服』（集英社新書、2002）

伊勢崎賢治『国際貢献のウソ』（ちくまプリマー新書、2010）

栗原俊輔『ぼくは6歳、紅茶ボランティアで生まれて。：スリランカ・農園労働者の現実から見えてくる不平等』（合同出版、2020）

Caballero-Anthony, "An Introduction to Non-Traditional Security Studies: A Transnational Approach" (SAGE Publications, 2016)

Naím Moisés, "What's Happening to Us: 121 Ideas to Explore the 21st Century" (PRH Grupo Editorial, 2024)

<科学・環境>

宇沢弘文『社会的共通資本』（岩波新書、2000）

斎藤幸平『人新世の「資本論」』（集英社新書、2020）

レイチェル・カーソン『沈黙の春』（新潮文庫、1974）

セルジュ・ラトゥーシュ著、中野佳裕訳『脱成長と食と幸福』（白水社、2024）

矢野雅文『科学資本のパラダイムシフト』（文化科学高等研究院出版局、2021年）

<アメリカ・中東・アフリカ>

石田洋子『アフリカに見捨てられる日本』（創成社、2008）

伊藤紀子『「食」でつながるアフリカのコミュニティ：持続可能な地域の発展をかなえるための5つのヒント』（筑摩書房、2024）

末近浩太『中東政治入門』（ちくま新書、2020年）

内田隆三『ベースボールの夢』（岩波新書、2007年）

<東南アジア>

Chambers & Waitoolkiat, "Khaki Capital: The Political Economy of the Military in Southeast Asia" (Nordic Inst of Asian Studies, 2017)

<ジェンダー>

中村桃子『女ことばと日本語』（岩波新書、2012）

西井開『「非モテ」からはじめる男性学』（集英社新書、2021）

<文学>

ギー・ド・モーパッサン（高山 鉄男 訳）『脂肪のかたまり』（岩波文庫、2004年）

チョ・ナムジュ著、斎藤真理子訳『82年生まれ、キム・ジョン』（ちくま文庫、2023）

韓江著、井出俊作訳『少年が来る』（クオン、2016）

呉明益著、天野健太郎訳『自転車泥棒』（文春文庫、2018）

ドストエフスキー著、安岡治子訳『貧しき人々』（光文社古典新訳文庫、2010）

ウィリアム・ゴールディング著、黒原敏行訳『蠅の王』（早川書房、2017）

チョ・ナムジュ著、斎藤真理子訳『82 年生まれ、キム・ジョン』（筑摩書房、2018）